

参考文献

<真理論に関して>

・J. L. Austin, “Truth,” *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volume xxiv (1950). Reprinted in Austin, *Philosophical Papers*, 1961, 「真理」信原幸弘訳(坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房)

これに対するストローソンの批判が

・Strawson, “Truth,” *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volume xxiv (1950). Reprinted in Strawson, *Logico-Linguistic Papers*, 1971.

これに対するオースティンの応答が、

・J. L. Austin, “Unfair to Fact,” (1954) in Austin, *Philosophical Papers*, 1961, 「事実に対する不当」丹治信春訳(坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房)

上の論文への言及はないが、その後のストローソンの論文が

・Strawson, “Truth: A Reconsideration of Austin’s View,” *The Philosophical Quarterly*, vol. 15, 1965. Reprinted in *Logico-Linguistic Papers*, 1971.

オースティンとストローソンの論争についてのサールの発言が

・J. R. Searle, *The Construction of Social Reality*, 1995, Chap 9 Truth and Correspondence.

・P. Horwich, *Truth*, 1990, 2nd ed. 1998.

<行為遂行型発話に関して>

・J. L. Austin, “Performative Utterances,” (1956) in Austin, *Philosophical Papers*, 1961, 「行為遂行的発話」中才敏郎訳(坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房)

これに対するバックの批判が

・K. Bach, “Performatives are Statements too,” *Philosophical Studies* 28: 229-36. Reprinted in Bach and Hamish, *Linguistics and Communicative Speech Acts*, 1979.

これに対するサールの批判が

・J. R. Searl, “How Performatives Work,” *Linguistics and Philosophy* 12, 1989, 535-558, Reprinted in *Essays in Speech Act Theory*, edited by D. Vanderveken and S. Kubo, 2001.

これに対する Bach and Hamish の批判が

・K. Bach and R. M. Hamish, “How Performatives Really Work: a reply to searle,” *Linguistics and Philosophie*, 1992, vol 15. issue 1, pp. 93-110.

§ 5 問答の観点からの真理論(その2)

「§ 1 問答の観点からの真理論」では、真理のインフレ主義の欠点を述べて、真理のデフレ主義のほうが優れていることを述べた。次に、真理の消去主義への批判として、真理概念の必要性を、一般化の機能、文代用の機能、に加えて、ある種の問いを可能にする機能があるかもしれないことを述べた。

§ 4では、推論を理論的推論と実践的推論に区別して、それぞれが問いとの関係で可能になることを証明した。

そのとき、実践的推論とは、前提および結論のなかに真理値をもたない文ないし発話をひとつ以上含んでいる推論であると定義したので、推論のこの区別は、真理値を持つ文ないし発話と真理値をもたない文ないし発話の区別を前提していた。

この § 5では、この区別を明確にしたい。

## 1 Austin の場合

オースティンは、初期には、真理値をもつ言明と、真理値を持たない行為遂行的発話を明確に区別していた。しかし、論文“Performative Utterances,” (1956)では、その区別を保持しつつも、むしろ類似性を強調している。

彼はまず、言明であるか行為遂行的発話であるかの「文法的規準」(訳 395)を設定することが難しいという。しかし、行為遂行的などんな発言(発話)も、「私は[これこれのことを]……」で始まるかあるいは「あなたは(または彼は)これによって[これこれのことを]……」で始まる上記のは二つの標準的な形式のうちの一つに還元ないし敷衍もしくは分析されうるであろう。」(訳 395) {後者の例として考えられているのは、「あなたは、ここに、有罪を宣告される」「この船は、ここに、〇〇号と命名される」というようなものであろう}

彼は、行為遂行的発話を次の二つに区別する。行為遂行動詞をもつ行為遂行的発話、例えば「私はあなたにその戸を閉めるように命令する」と、行為遂行動詞を含まない行為遂行的発話「原初的な行為遂行的発話」(primary performative utterance)、例えば「その戸を閉めなさい」を区別する。そして、後者は前者に「還元ないし敷衍もしくは分析されうる」と言う。

これによって、オースティンは言明と行為遂行的発話を区別する。そして、前者は真理値を持つが後者は真理値を持たないと考える。

「言明とは真または偽なるものであったし、行為遂行的発言とは、これに対して、適切または不適切なるものであった。さて、この対比は確かに、振り返ってみれば、不十分なものである。もちろん、言明は、それが事実対応するかあるいは対応しないか、つまり真であるかまたは偽であるかという事柄に関して評価されがちである。しかし言明はまた、行為遂行的発言とあらゆる点で同じだけ不適切になる余地がある。」(訳 402)

ここの引用箇所およびこの論文では、言明と行為遂行的発話の類似性が強調されているのだが、しかし、区別は明確にあり、その区別とは真理値を持つかどうかの区別であり、それは「事実に対応するかあるいは対応しないか」の区別であることが明確に書かれている。

- ・ オースティンは真理の対応説を主張するので、それによって真理値をもつ発話と、真理値を持たない発話を区別できる。ただし、オースティンの対応説は、しかし発話と事実の対応関係を規約として捉える「純化された」対応説である。
- ・ これに対して、Bach は、行為遂行動詞をふくむ行為遂行的発話もまた真理値を持つとオースティンを批判した。
- ・ また、オースティンの真理の対応説に対しては、ストローソンが批判を行い、彼は真理の余剰説を主張した。

## 2、サールの場合。

サールは、前に述べたように、行為遂行動詞を含む文を「行為遂行文」とよび、その発話を「行為遂行的発話」とよぶ、そしてこれは宣言型発話の一種(「言語的宣言」)なので、宣言型発話一般と同じく、真理値持つと考えた。しかし、その理由は、Bach の考えた理由とは異なっており、両者の間には、論争がある。

ところで、サールは、オースティンの対応説に対するストローソンの批判には賛成する。しかし、ストローソンのように、真理の余剰説と真理の対応説は両立しないと考えるのではなくて、両立可能であるとして、サールは真理の対応説も擁護する。したがって、サールは真理の対応説よって、真理値をもつ発話と真理値を持たない発話を区別できることになる。

問い「もし私たちが真理の対応説をとらないとすると、私たちはどのようにして、真理値をもつ発話と真理値を持たない発話を区別すればよいだろうか？」

真理のインフレ理論(対応説、整合説、プラグマティズム、合意説など)が問題を抱えていることについては、§1での述べたので、真理のデフレ主義をまず検討してみよう。

### 3 真理のデフレ主義の再検討

ここでは、Horwichのミニマリズムをもとに、真理のデフレ主義を検討したい。Horwichは、次の同値図式

(E) pが真であるのは、pであるときそのときに限る。

のpに具体的な命題ないし文ないし発話を代入した事例の全てを、真理のミニマル理論の公理と呼ぶ。そして、「が真である」という真理述語について語るべきことは、これが全てであると主張する。

この定義には次の欠点があるのではないだろうか。

**欠点1:真理のデフレ主義は、文が真であるか偽であるかの判断基準を与えない。**

- ①対応説なら対応するのが真、それと矛盾する文が偽、(あるいは対応しない文が偽)である。
- ②整合説なら真とされる文の集合と整合的な文が真、矛盾する文が偽である。
- ③プラグマティズムなら、有用な文が真、それと矛盾する文が偽

しかし、真理のデフレ主義は、文が真であるか偽であるかの判断基準を与えない。

(Horwichならば、<文pが真であるか、偽であるかの判断をすることは、pが成り立つか、pが成り立たないかの判断をすることであり、pが成り立つをpが事実と対応することと考えたり、他の成り立つ文と整合的であることと考えたり、有用であることとかえたりすればよく、そのことは真理の理解とは独立している>と答えるかもしれない。しかし、それでよいのだろうか?)

**欠点2:真理のデフレ主義は、文が真理値をもつか持たないかの判断基準を与えない。**

- ①対応説なら、対応する可能性がある文が真理値をもつ。
- ②整合説なら、真とされる文の集合からその文ないしその否定の文が論理的に導出される文が真理値をもつ。
- ③プラグマティズムなら、有用となる可能性のある文が真理値をもつ。

しかし、真理のデフレ主義は、文が真理値をもつかどうかの判断基準を与えない。

Horwichのミニマリズムについて言えば、同値図式に代入できる文ないし発話であるかどうかの判断基準を彼は与えていない。真理述語がつけられるのは、命題や文や発話であるというが、しかしどんな命題や文や発話であっても、同値図式に代入できるのではない。彼が同値図式を考えたとき、真理を持つ文だけが念頭にあったのではないだろうか。真理値をもつ文と持たない文の区別を前提して、真理値を持つ文だけについて適用しなければ、同値図式は成り立たない。

たとえば、「撃て」もまた命題ないし文ないし発話である。しかし、

「撃て」が真であるのは、撃て、のときそのときに限る

とはいえないだろう。

{Horwichが真理値を持つ文だけを文だと考えていたのだとすると、私たちは、Horwichによる「文」の定義を検討すれば、それが、同時に真理値を持つ文と持たない文の区別規準として使えるのかもしれない。}

### 4、現時点での論争点

(1)発話を次の3つに分けてみよう。

- ①言明(主張型発話)
- ②宣言(行為遂行動詞を含む行為遂行的発話を含む)
- ③原初的行為遂行的発話(行為遂行動詞を含まない行為遂行的発話)

①が真理値を持つことと、③が真理値を持たないことについては、Austin, Bach&Harnish, Searleの三人が同意している。

②について、Austinは真理を持たないと主張し、Bach&HarnishとSearleは真理値を持つという。

オースティンは、その主張の論拠を明確に述べていないが、つぎのように考えられる。

<③は②へ還元、敷衍、分析されうる。ゆえに、③が真理値を持たないのならば、②も真理値をもたない。逆に、もし②が真理値を持つならば、③も真理値をもつことになる。これはおかしいだろう。>オースティンの論証がこのようなものだとすると、<③は②へ還元、敷衍、分析される>という主張を詳しく検討する必要がある。(これについては、後述)

ところで、バック&ハーニッシュとサールは、結論は同じなのだが、その説明方法については対立している。その対立を確認しておこう。

## (2) Bach&Harnishと Searle の論争

Bach1975 Bach&Harnish1992 は、宣言型発話が、まず言明として真であり、それゆえに宣言という発語内行為が成立すると考える。彼らは、次の推論でそれを説明する。

- (1) He is saying "I order you to leave".
- (2) He is stating that he is ordering me to leave.
- (3) If his statement is true, then he must be ordering me to leave.
- (4) If he is ordering me to leave, it must be his utterance that constitutes the order (what else could it be?).
- (5) Presumably, he is speaking the truth.
- (6) Therefore, in stating that he is ordering me to leave, he is ordering me to leave.

それに対して、サールは、宣言型発話では、まず宣言の発語内行為が成立し、それによって発話が真となる、と考える。サールは上の推論をつぎの例で批判する。

- (1) He is saying "I am the King of Spain".
- (2) He is stating that he is the King of Spain.
- (3) If his statement is true, then he must be the King of Spain.
- (4) If he is the King of Spain, it must be his utterance that constitutes his being the King of Spain (what else could it be?).
- (5) Presumably, he is speaking the truth.
- (6) Therefore, in stating that he is the King of Spain, he is being the King of Spain"

前の推論が妥当ならば、この推論も妥当だろう。しかし、この結論(6)は明らかにばかげている。

ミニレポート課題1: バック&ハーニッシュならサールの批判にどう応答するでしょうか?

ミニレポート課題2: ②は真理値を持つとおもいますか? 答えとその理由を書いてください。